

力(ひずみ)に等する加速度は低周波数帯域であり設計震度として用いる加速度は小さくともよいことがわかった。
その設計震度(加速度)を用いて応力度計算した場合多少のバラツキはあるが実測の鉄筋応力と大体同程度の値を示す事がわかった。

3. 振動モデルによる解析

いままで解析結果をふまえ、多質点バネ・マス系の振動モデルを作成し、実測の応答スペクトルと比較し、その妥当性を検討した。さらに表2に示すように汎用性をたせるため諸定数(立壁H、張出し長L、断面剛性EI等)を変化させて各点の応答加速度実効値を求め、実測値との比をとり、諸元変化による応答倍率を求めた。その結果応答倍率の変化程度の最も大きいものは張り出しスラック長さの変化であることがわかった。

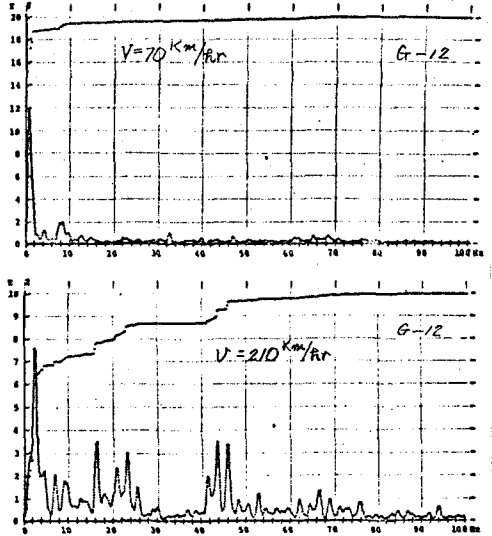


図4



表2

